

ビルマ語の指示限定詞 *dì* の解釈に関する試論

トゥザ ライン

An Essay on the Interpretation of the Burmese Demonstrative Determiner “*dì*”

THUZAR HLAING

Abstract

This paper will discuss the Burmese demonstrative determiner “*dì*”, which means “*kono*” (“this”) and “*imano*” (“now”) in Japanese. My work proposes that “*dì*” imparts the meaning of “*imano*”. As a result, the paper demonstrates that: (1) the indication of the spatial and temporal position of the deictic expression “*dì*” may indicate the current position and the near past; (2) the misalignment of time occurs when “*dì*” is used in the Japanese meaning of “*imano*”; (3) potential contextual information like old information and shared knowledge is added when “*dì*” is used in the Japanese meaning of “*imano*”; (4) it is necessary to classify “*dì*” into the function of “deictic with a particular anaphoric” in the cases that indicate the near past and when the misalignment of time occurs and potential contextual information is required; and (5) finally, the deixis can be used because the anaphora is in existence rather than the anaphora being derivative upon the deixis.

From the above linguistic discussion, I argue that it is necessary to rethink the function of demonstratives, and reconsider the idea that “anaphora is derivative upon deixis” (Bühler 1934, Lyons 1975; 1977; 1979 etc).



目次

0. はじめに

0.1. 指示詞の概要

0.2. 研究目的

0.3. 「この」と「今の」の意味確認

1. 「この」と「今の」の2つの意味に解釈される di

2. 「今の」の意味にしか解釈できない di

2.1. ドキュメンタリーのシーンで現れた di

2.2. 自然会話に現れた di

3. 指示限定詞 di の解釈を決定する条件

3.1. 「この」の意味として解釈できる場合の di

3.2. 「今の」の意味として解釈できる場合の di

4. まとめ

主な参考文献

用例出典

略号

0. はじめに

指示表現は直示由来であり、Bühler(1934)¹; Lyons (1975; 1977; 1979) などによる「文脈指示(照応)は現場指示(直示)から派生した」という説が一般的に受け入れられている。しかしながら、直示から照応への派生プロセスの可能性は否定できないものの、その説に該当しない用例が存在する。

本稿では、現代ビルマ語²の指示詞のうち、主に口語体ビルマ語の指示限定詞 di³の例を基に、文脈情報(照応)が存在しているからこそ現場指示用法が使用できるという言語事実を取り上げ、本来の指示表現のあり方を探る。

0.1. 指示詞の概要

指示詞は、特定のヒトやモノなどの対象を話し手／聞き手、書き手／読み手の間で同定できるように指し示す場合に用いる語である。指示詞の用法は一般的に現場指示と文脈指示とに分類される。現場指示は、テキスト外的指示によって示される外部照応の直示的用法のことを指し、文脈指示は、テキスト内的指示によって示される内部照応の照応的用法(前方照応と後方照応)のことを指す。岡野(2007: 41)は指示詞の用法について、「指示詞には二つの用法がある。ひとつは相対的な空間的位置、すなわち話し手から近い位置にあるものと遠い位置にあるものとを指し分ける(直示的用法)。もうひとつは文脈上『すでに話したこと』

や『これから話すこと』を指し示すものである(照応的用法)」と述べている。つまり、直示的用法は指示対象の同定に発話時における空間的位置が関与する場合の現場指示のことであり、照応用法は指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与する場合の文脈指示のことである。また、拙論(2016)では、これまで多くの指示詞の研究に採用されてきた現場指示(直示)と文脈指示(照応)が、場合によっては切り離せない状況にあるということを指摘し、「文脈ありの現場指示」用法を設けることを提案した。文脈ありの現場指示は、眼前にある指示対象を即座に直示したことにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とし、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えられる場合に用いられる用法のことを指す。言語的先行文脈とは、聞き手にとっての旧情報や共有知識(聞き手が知っていることと話し手が信じていること)といった何らかの暗示的な文脈情報(照応)のことを指す。本稿では、口語体ビルマ語の指示詞について、一般的によく用いられている「現場指示」と「文脈指示」に、拙論(2016)で提案した「文脈ありの現場指示」を加えた3つの用法に分けて考える。

本稿で扱う口語体ビルマ語の指示詞とは、di, dà, dihà, ?édi, ?édà, ?édihà, hò, hòhà (hǎwà) といった語句のことを指す。ビルマ語の指示詞は指示限定詞と指示代名詞の2つに分けることができる。指示限定詞としては di, ?édi, hò がある。指示代名詞は、さらに位置指示代名詞の di, ?édi, hò と非位置指示代名詞の dà/ dihà,

ʔédà/ ʔédihà, hòhà (hǎwà) に分けられる⁴。

指示限定詞は、名詞に先行してその名詞を限定する。
位置指示代名詞は格助詞 (CM) を伴って空間上の相

対的な位置を表す。非位置指示代名詞はモノ名詞(句)
や生物名詞を対象とする。

表 1. 口語体指示詞の分類

語類			指示形式		
指示詞	指示限定詞		dì + N (+ CM) 「この」	ʔédì + N (+ CM) 「その」	hò + N (+ CM) 「あの」
	指示代名詞	位置指示代名詞	dì (+ CM) 「ここ」	ʔédì (+ CM) 「そこ」	hò (+ CM) 「あそこ」
		非位置指示代名詞	dà/ dihà 「これ」	ʔédà/ ʔédihà 「それ」	hòhà (hǎwà) 「あれ」

0.2. 研究目的

本稿は、ビルマ語の現場指示として用いられる指示
限定詞 dì には日本語の「この」と「今の」にあたる
意味があることを用例で示し、さらに「今の」という
意味に解釈される dì が使われる条件を確認すること
で、本来の指示表現のあり方を探ることを目的とする。

0.3. 「この」と「今の」の意味確認

次節に入る前に、dì と対照させる日本語の「この」
と「今の」の意味を確認する。以下の定義は、広辞苑
第五版から引用したものである。

「この」は「自分の手に触れるほど近くにあるもの、
とそれを基準にして表せる位置を指示する」ものであ
る、と定義されている。

・この『連体』

(もと、コは代名詞、ノは格助詞) 話し手から「これ」
と指せる位置にあるもの・ことにかかわる意。

- ① 自分の手に触れるほど近くにあるものを指示す
る⁵。古事記(中)「一蟹やいづくの蟹」。「一本
をあげよう」
- ② ①に述べたものを基準にして表せる位置を指示
する。「一うしろを捜せ」

- ③ 今述べる事柄に関係する意。万葉集(15)「こ
れや一名に負ふ鳴門の渦潮に」。「一年ごろずっ
と」「一点に注意」

- ④ すらすら言えない時にはさむ、つなぎの語。ま
た、相手を叱る時の強めの語。「一親不孝者」

一方、「今」は過去と未来との境である瞬間・現在
であり、その意味と見なせるほどの近い過去または未
来である、と定義されている。また、現在を含んだあ
る時間・期間のことを指す、とされている。

・今『名』

- ① 過去と未来との境である瞬間。現在。「一正午
だ」
- ② 現在を含んだ、ある時間・期間。古事記(上)「一
こそばわどりにあらめ後はなどりにあらむを」。
「一の首相」
- ③ 現に話をしているこの局面(で)。万葉集(2)
「後にも逢はむ一ならずとも」。「一この点を P
とする」
- ④ 今①と見なせるほど近い過去または未来。「一
来たばかりだ」「一の人、知ってるかい」「一行
きます」
- ⑤ (「一に」の形で) そうは遠くない未来。将来。
そのうち。

⇒今に②。

- ⑥ (今度あらたに加わるの意で)新しいこと。また、そのもの。万葉集 (14)「信濃道は一の壑道 (はりみち)」
- ⑦ (現在におけるの意で、現在の人を昔の人になぞらえるのに使う)現代の。当世の。「一業平 (なりひら)」 「一小町」

1. 「この」と「今の」の2つの意味に解釈される *dì*

口語体ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* には、日本語の「この」という意味と「今の」という意味があり、使用する場面はそれぞれ異なる。

以下、指示限定詞 *dì* が指している意味範囲を確認し、日本語の「この」と「今の」という意味とどう対応しているかを考察する。

(1) *dì* *yăthá*

this.(DEM) train

この電車 / 今の電車

「この電車：現在駅に停まっている電車・これから出発する電車／

今の電車：(視界内の存在によらず) 目の前を通ったばかりの電車」

ビルマ語の *dì* は「この」という意味と、「今の」という意味を持っている。*dì yăthá* と言うとき、「現在駅に停まっている電車あるいはこれから出発する電車」つまり「この電車」と解釈できるし、「(視界内の存在によらず) 目の前を通ったばかりの電車」つまり「今の電車」とも解釈することができる。同様に、例 (2) のように指示詞を使わずに *ʔăgû* 「今の」を用いて表現する場合も、例 (1) のような解釈が可能である。以下、例 (2) と例 (3) は指示詞を使わずに表現する場合の例である。

(2) *ʔăgû* *yăthá*

now/ current train

この電車 / 今の電車

「この電車：現在駅に停まっている電車・これから出発する電車／

今の電車：(視界内の存在によらず) 目の前を通ったばかりの電車」

(3) *gûnâ* *yăthá*

previous train

先の電車 / 今の電車

「(完全に視界内に存在しない) 目の前を通ったばかりの電車」

例 (1) と例 (2) でみられるように、ビルマ語の *dì yăthá* と *ʔăgû yăthá* は、日本語の「この電車」として解釈できる場合もあれば、「今の電車」として解釈できる場合もある。ただし、「今の電車」と解釈できるのは、視界内の存在によらず目の前を通ったばかりの電車の場合のみである。

発話の中で *dì* を用いるか *ʔăgû* を用いるかは話し手の選択次第であり、*dì* が「この」の意味になるか「今の」の意味になるかはその発話が成立した場面での発話時点と指示対象が発話現場に存在した時点の時間のズレ (以下、時間のズレ) があるかどうかによると考えられる。「今の電車」という意味を明確に表したい場合、例 (3) のように *gûnâ* 「先」を用いて *gûnâ yăthá* 「先の電車・今の電車」という表現をする⁶。

以上のことから、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* には日本語の「今の」の意味が含まれていることが分かる。*dì* を用いて指し示された *dì yăthá* が「今の電車」という意味で使われる場合、指示対象の電車はもう発話現場を離れた「目の前を通ったばかりの電車」を指し、現場指示とは言い難くなる。発話現場を離れた指示対象を指す場面であるにも拘わらず、現場指示の *dì* が使われていることが、空間的・時間的位置に時間のズレが生じる場合での *dì* の用法である。話し手は、指示対象についての情報を聞き手

が知っていると感じて、互いに共有の知識を持っていることを前提に発話していると考えられる。

次のようにヒトを指し示す場合でも同様に現場指示とは解釈できない現象が観察される。

(4) *dì* *ʔāmā*⁷

this.(DEM) sister

この姉さん / 今の姉さん

「この姉さん：現在目の前にいる姉さん・これから現場を離れようとしている姉さん／

今の姉さん：（もう視界内にはいない）現場を離れたばかりの姉さん」

(5) *ʔāgû* *ʔāmā*

now/ current sister

この姉さん / 今の姉さん

「この姉さん：現在目の前にいる姉さん・これから現場を離れようとしている姉さん／

今の姉さん：（完全に視界内に存在しないが）現場を離れたばかりの姉さん」

(6) *gûnâ* *ʔāmā*

previous sister

先ほどの姉さん / 今の姉さん

「（完全に視界内に存在しない）現場を離れたばかりの姉さん」

例(4)の *dì ʔāmā* には「この姉さん」という意味と、「今の姉さん」という意味があり、例(5)のように *ʔāgû ʔāmā* に言い換えても同様な解釈ができる。明確に「今の姉さん」という意味で表したい場合、例(6)のように *gûnâ ʔāmā* 「先ほどの姉さん・今の姉さん」という表現をする。

例(1-3)では、*gûnâ yāthá* は「もう駅を通り過ぎた電車・先の電車」の意味でしか使われないが、*dì yāthá* (*ʔāgû yāthá*) の場合は目の前を通った「駅を通

たばかりの電車」の意味と目の前にある「駅に停まっている電車・これから出発する電車」の両方の意味で使われることを示した。*dì ʔāmā* (*ʔāgû ʔāmā*) の例にも同様な現象がみられる。*dì ʔāmā* (*ʔāgû ʔāmā*) には日本語の「この姉さん」と「今の姉さん」という2つの意味がある。日本語の「この姉さん」の場合は発話現場にいる女性のことを指し、「今の姉さん」の場合は、発話現場から離れたばかりの女性のことを指す。明確に「今の姉さん」という意味で表したい場合、例(6)のように *gûnâ* 「先」を用いて *gûnâ ʔāmā* 「先ほどの姉さん・今の姉さん」という表現を用いる。また、例(1)と(4)で見られるように、それぞれの *dì yāthá* と *dì ʔāmā* が「今の電車」「今の姉さん」の意味で目の前に存在しない指示対象を指す場合など、現場指示とは解釈し難い場面においても、現場指示の *dì* が使われている。

以上のことから、ビルマ語の現場指示 *dì* は現場指示でありながらも指示対象が「目の前を通った」ことが確認できた場合、近い過去のことを指す「今の」という意味で使えると言えよう。すなわち、この *dì* は現場指示の形をしているが、何らかの文脈情報がないと指示対象が同定できないという条件が付いており、純粋な現場指示とは解釈し難い *dì* である。つまり、拙論(2016)で提案した特定の文脈を持つ一種の「文脈ありの現場指示」と考えられる。

2. 「今の」の意味にしか解釈できない *dì*

本節では、用例を用いて「今の」の意味にしか解釈できない *dì* について詳細に検討する。主にドキュメンタリーのシーンや自然会話⁸のデータを用いて、*dì* が指す空間的・時間的な位置を明らかにする。

2.1. ドキュメンタリーのシーンで現れた *dì*

まず、ドキュメンタリーのシーンで現れた指示限定詞 *dì* の例を取り上げる。

例(7)はドキュメンタリーの中で、映画の審査を行っている場面での発話であり、乞食のシーンがスクリーンに映し出されて間もなくして一人の審査員が発したセリフである。その後に乞食のシーンがスクリーンに映っている場合も、スクリーンから消えた場合も di を用いて指すことができる。今回の場合、審査員が di を用いて目の前にあるドキュメンタリーのシーンに直示しているように見えるので、純粋な現場指示用法の di に分類してしまいがちだが、実はスクリーンに乞食のシーンが現れてからでないと指さし行為も成立しない。審査員の指さし行為は乞食のシーンが現れた直後に行われている。先に乞食のシーンが現れたからこそ指さしの直示ができるわけである。この現象は、di が発せられたときに時間のズレが生じる場合である。近い過去に乞食のシーンが現れたという文脈情報が前提となるので、一種の「文脈ありの現場指示」とであると見えよう。

- (7) 乞食のシーンがテレビのスクリーンに映し出されたとき

di ?ăk^hán phye?

this.(DEM) scene ban.

di ?ăk^hán ph^hye?

this.(DEM) scene ban.

dà nàiŋŋàndò=ḵò sògá=nè=ṭà.

this.(DEM) State=ACC insult=stay=nc.RLS

dà nàiŋŋàndò=ḵò

this.(DEM) State=ACC

ṭei?k^hà-câ=?àun lou?=nè=ṭà.

dignity-down=PURP do=stay=nc.RLS.

bêhnê kwà.

how.OBL FP=M

今のシーンをカット！今のシーンをカット！

これは国を侮辱しているのだ。これは国の名誉を汚しているのだ。チェッ。

BAN THAT SCENE! 7:15/18:42

2.2. 自然会話に現れた di

次に自然会話に現れた指示限定詞 di の例を取り上げる。

今回扱う自然会話は、同じ大学に留学しているミャンマー人女子留学生 4 人に纏わる 2 人会話である。この会話に現れる女子留学生 4 人を仮に「A: 留学生 1、B: 留学生 2、C: 留学生 3、D: 留学生 4」とする。

まず、この 4 人の関係を概観する。A と B は同級で、C と D は A・B の先輩である。そして、C は A・B と同じ学生寮に住んでいる仲のいい先輩であり、D は別のところに住んでいるあまり親しくない先輩である。

この自然会話の場面設定は、とある教室に同級の A・B があまり親しくない D と会う機会があって、D が席を離れている間に成立した会話である。A と B の会話が成立した時には D はもう視界内にはない。C も発話現場に現れない。この会話では、特に C と D を区別する必要がある限り、A・B は C と D に対して ?ămâ (姉さん) という語を使用し、区別をするときは直接名前を出すか、指示詞を用いるか、の形でお互いに会話の理解を得ている。

会話の内容からは、A と B が国からのお土産としてもらったミャンマーのラベツ (お茶葉) をその日の夜に野菜などで和えて食べようと、言葉を交わしていることが伺える。このように計画を立てているうち、A(e) が ?ămâ=ḵò=pà k^hò=lai?=mè. 「姉さんも呼ぼう」と、どの ?ămâ (姉さん) なのかを明確に明示せずに、初めて或る別な人物を会話の中に導入した。にもかかわらず、B(d) は「ピョーピョー姉さん (C)」を指していることを理解し、di ?ămâ=ḵò=ḵó. 「今の姉さんは？」というように指示限定詞の di を用いて、またもう一人の新しい人物を会話に取り入れる。A(f) も B(d) が di を用いて新しく導入した人物がどの ?ămâ (姉さん) のことを指しているのかをすぐに理解し、二人の会話がスムーズに進行している。

A(a): lǎp^hɛ? pà = tɛ̃ = lè pyàn = yìn
 tealeaf attach=vs.RLS=FP return=COND
 kòunbínni tʰwá = pí = tɕ
 convinence store go=and=SC
 nyâ tɕou? -sá = mǎ = lá.
 night toss-eat=vs.IRR=Q
 ʔámâ = kɔ̃ = pà k^hɔ̃ = lai? = mɛ̃.
 sister=ACC=also call=AUX=vs.IRR
 ラベツ入ってるよ。帰りにコンビニ行って
 夜、作って食べる？ 姉さんも呼ぼう。

B(a): ʔé. nyâ câ = yìn tɕou? = sá = mɛ̃.
 yes. night reach=COND toss=eat=vs.IRR
 nyâ câ = yìn tɕou? = sá = mɛ̃.
 night reach=COND toss=eat=vs.IRR
 うん、夜作って食べる。夜作って食べる。

A(b): pyàn = yìn. nîn = hmà k^hǎyánjìnɿ = tʰwè
 return=COND [2].OBL=LOC tomato=PL
 bà = tʰwè hyî = lá.
 what=PL have=Q
 帰りに。あなたにトマトなんかある？

B(b): mǎ = hyî = bú.
 not=have=NEG
 ない。

A(c): k^hǎnâ nè tʰwá-wè = lai? = mɛ̃.
 a moment stay go-buy=AUX=vs.IRR
 後で買いに行く。

(中略)

A(d): gòbì wè = mɛ̃.
 cabbage buy=vs.IRR
 キャベツ買おう。

B(c): gòbì = yè k^hǎyánjìn = yè tɕou? -sá = mɛ̃.

cabbage=and tomato=and toss-eat=vs.IRR
 キャベツと、トマトと、作って食べよう。

A(e): ʔámâ = kɔ̃ = pà k^hɔ̃ = lai? = mɛ̃.
 sister=ACC=also call=AUX=vs.IRR
 姉さんも呼ぼう。

B(d): ʔé. ʔámâ-ph^yóp^hyó = kɔ̃.
 INTER sister-NAME=ACC
 dī ʔámâ = kɔ̃ = kɔ̃.
 this sister=ACC=Q.CONTR
 dī ʔámâ = kɔ̃...mǎ = káuN = pà = bú = nò.
 this sister=ACC...no=good=PL=NEG=FP
 dī ʔámâ = kâ...ʔálou? = twè bà = tʰwè...
 this sister=NOM...work=PL what=PL
 うん。ピョーピョー姉さんを。
 今の姉さんは？
 今の姉さんを…（呼んだら）悪いね。
 今の姉さんは、…仕事とかで…

A(f): ʔálou? = nê = s^hò = tɕ ʔín...
 work=COM=say=SC INTER
 仕事があるから…うーん。

B(e): ʔámâ-ph^yóp^hyó = kɔ̃ k^hɔ̃ = lai?.
 sister-NAME=ACC call=AUX
 nyâ câ = yìn tɕou? = sá = mɛ̃.
 night=reach=COND toss=eat=vs.IRR
 ピョーピョー姉さんと呼んで、夜作って食べよう。

A(g): nyâ câ = yìn tɕou? = sá = mɛ̃.
 night reach=COND toss=eat=vs.IRR
 夜作って食べよう。

この自然会話で、注目すべきであるのは、B(d)で
 現れる発話時点で発話現場には居ない ʔámâ（姉さん）
 を指示限定詞の dī を用いて指す「dī ʔámâ」である。

この場合の di は現時点では発話現場に居ないが、先ほどまで一緒に居た ?āmā (姉さん) のことを指しているため、「今の姉さん」だと解釈しなければならない。「この姉さん」という解釈はできない。

この自然発話で前提となっているのは、di を用いて指し示された対象の D は今回の会話が成立する少し前までは A と B がいる発話現場の空間内にいたことが確認できることである。D は会話が成立したとき指示対象は既に発話現場を離れているが、B(d) は、D がまだ近くに居るかのよう近称の現場指示 di を用いてどの人物であるかを限定し、聞き手である A の理解を得ている。D は初めて会話に導入する対象人物であるが、di を用いて導入することによって、どの人物であるかが限定される。このように指示詞と指示対象が同時に導入されることによって、「di ?āmā」が「今の姉さん」であるということが解釈できる。もし、指示対象である D が会話の直前に発話現場に居なかった場合、di を用いて指すことはできず、C を導入したときのように直接名前を言う形で指さなければならない。

以上の例で示したように、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 di は日本語の「この」と「今の」に対応する。そして、「今の」という意味として解釈される di は発話現場に居ない人物であり、先行文脈にも表れていない、初めて登場する人物を指している。このように、指示対象の人物が現時点では発話現場に居ないが、先ほどまで一緒に居たということを受けて、まだ発話現場に居るかのよう語っているからである。

本節では、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 di が、空間的位置もしくは時間的位置を指すときの時間的範囲には、「この」のように「現時点」を指す場合もあれば、「今の」のように「ごく近い過去」を指す場合もあることを示した。そして、「今の」のように「ごく近い過去」の意味を持つ場合、指示対

象は一度発話現場に現れたことがあり、かつ発話時点では現場に居ない。つまり、会話参加者の間での旧情報として共有されている。にもかかわらず、会話の中にはいまだ発話現場に居るかのよう近称の現場指示 di を用いている。このように発話現場に居ない指示対象に現場指示 di を用いて指すことができるのは、指し示された指示対象が一度発話現場に現れたというこれまでの聞き手に取っての旧情報である暗示的な文脈情報があるからである。つまり、暗示的な文脈情報があるからこそ現場指示の di が使えるのである。これも、「文脈ありの現場指示」に分類できると考えられる。

本節で示した用例のような暗示的な文脈情報（照応）が必要な現象は、Bühler(1934); Lyons(1975; 1977; 1979) などの「文脈指示（照応）は現場指示（直示）から派生した」という説に反しており、むしろ文脈指示が存在しないと指示対象が同定できない場合であると考えられる。

3. 指示限定詞 di の解釈を決定する条件

本節では、現場指示として用いられる指示限定詞 di の解釈を決定する条件を整理する。

3.1. 「この」の意味として解釈できる場合の di

指示限定詞 di が「この」の意味として解釈されるとき、指示対象が話し手/聞き手の視界内の空間である発話現場に存在し、空間的位置に物理的距離があることが確認できることが前提になる。いわゆる現場指示用法で使われる di の場合である。

3.2. 「今の」の意味として解釈できる場合の di

一方、指示限定詞 di が「今の」の意味として解釈さ

表2. 指示限定詞 di の解釈を決定する条件

条 件			di 「この」	di 「今の」
指示対象が発話現場に存在する	空間的位置	物理的距離あり	○	×
指示対象が発話現場に存在してよい	時間的位置	時間のズレあり	×	○
指示対象が発話現場に存在しない	付け足された暗示的な文脈情報 (照応)	旧情報 (話し手・聞き手に取っての既知) あり	×	○
		共有知識 (聞き手が知っていると話し手が信じていること) あり	×	○

れるとき、1) 指示対象が発話現場に存在するか否かにかかわらず、時間的位置に時間のズレが生じるかどうか条件になる場合と、2) 指示対象が発話現場に存在しないが、その指示対象が以前に発話現場に現れたことがあるという情報を話し手と聞き手の間で共有していることが重要であり、このような旧情報・共有知識を持っているという「付け足された暗示的な文脈情報」が必要となる場合である。

以上 3.1. と 3.2. で述べた指示限定詞 di の解釈を決定する条件を表2 でまとめる。

4. まとめ

本稿では、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 di が日本語の「この」という意味と「今の」という意味を持っていることを用例を用いて考察を行い、特に di が「今の」という意味として解釈される条件を確認した。その結果、新たな言語事実を発見することができた。

- 1) 現場指示の指示限定詞 di が指している時点の時間的位置が現時点を指す以外に近い過去を指す場合があること (2 節を参照)、
- 2) 「今の」の意味として解釈される場合に時間の

ズレが生じること (2 節・3 節を参照)、

- 3) 「今の」の意味として解釈される場合に旧情報や共有知識といった暗示的な文脈情報 (照応) が付け足されること (2 節・3 節を参照)、
- 4) 以上の 1)～3) のような近い過去を指す場合、時間のズレが生じる場合と、暗示的な文脈情報を必要とする場合の di を「文脈ありの現場指示」用法に分類すべきこと (3 節を参照)、
- 5) こういった現象は「文脈指示 (照応) は現場指示 (直示) から派生した」というより、文脈情報 (照応) が存在しているからこそ現場指示的な用法が使用できること (2 節を参照) など。

以上の言語事実より、従来の指示の機能を再検討し、「文脈指示 (照応) は現場指示 (直示) から派生した」という概念と本来の指示表現のあり方をもう一度考え直す必要がある。「現場指示」と「文脈指示」という従来の指示機能に「文脈ありの現場指示」を加えるべきであり、また「文脈情報 (照応) が存在しているからこそ現場指示用法が使用できる」というこれまで受け入れられてきた概念に該当しない用例が存在することから、今後は「現場指示 (直示) が文脈指示 (照応) から派生した」場合があるということも考慮に入れて考えるべきであろう。

主な参考文献

- 岡野賢二 (2007) 『現代ビルマ (ミャンマー) 語文法』、国際語学社
- 岡野賢二 (2008) 「現代ビルマ語の『指示語』の体系について」、第 16 回チベット＝ビルマ言語学研究会、神戸学園都市 UNITY
- 岡野賢二 (2011) 「現代ビルマ語の『指示語』」、『東南アジア学』第 16 巻 pp. 75-86、東京外国語大学
- 加藤重広著・町田健編 (2004) 『日本語語用論のしくみ』、シリーズ・日本語のしくみを探る 6、研究社
- 新村出 (1998) 『広辞苑』第五版、岩波書店
- トゥザライン (2015) 「現代ビルマ語における指示詞一口語体を中心に」、『言語・地域文化研究』第 21 号 pp. 231-256、東京外国語大学
- トゥザライン (2016) 「ビルマ語の現場指示における特定の文脈を持つ用法について」、『言語・地域文化研究』第 22 号 pp. 171-183、東京外国語大学
- トゥザライン (2017) 「文語体ビルマ語の指示詞の体系」、『言語・地域文化研究』第 23 号 pp. 85-110、東京外国語大学
- Bühler, Karl. (1934). *Sprachtheorie*. Jena: Fischer
- Lyons, J. (1975). Deixis as the source of reference; *Formal Semantics of Natural Language*: pp. 61- 83, Cambridge University Press. (Reprinted as Ch.8: Lyons, J. 1991, *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 146-165, Cambridge University Press)
- Lyons, J. (1977). Ch. 15: Deixis, space and time; *Semantics, Vols.2*: pp. 636-724, Cambridge University Press
- Lyons, J. (1979). Deixis and anaphora; *The Development of Conversation and Discourse*: pp. 88-103, Edinburgh University Press. (Reprinted as Ch. 9: Lyons, J. 1991, *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 166-178, Cambridge University Press)
- Lyons, J. (1991). Ch.8: Deixis as the source of reference, Ch.9: Deixis and anaphora; *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 146-178, Cambridge University Press

用例出典

・ドキュメンタリー

BAN THAT SCENE! (?éđí?ăk^hánp^hye?)

<https://www.youtube.com/watch?v=gckHgn2a7fg> 7:15/18:42 (最終閲覧：2017/07/31)

・自然会話録音データ (非公開) (注 8 を参照)

略号

-: 語内の形態素境界, =: 接語境界, スペース: 構成素境界, /: 自由交替, ACC: 対格 (accusative), AUX: 助動詞 (auxiliary), COND: 条件 (conditional), CONTR: 対比 (contrastive), COM: 共格 (comitative), DEM: 指示名詞 (demonstrative noun), DIM: 指小辞 (diminutive), EXP: 経験 (experience), FN: 形式名詞 (formal noun), FOC: 焦点標識 (focus marker), FP: 終助詞 (final particle), INTER: 間投詞 (interjection), IRR: 叙想法 (irrealis(mood)), LOC: 所格 (locative), nc.: 名詞節標識 (noun clause marker), NEG: 否定 (法) (negative(mood)), NOM: 主格 (nominative), no/not: 否定辞 (negative marker) OBL: 斜格 (oblique), M: 男性用語 (Male speakers), NAME: 固有名詞 (proper name), PL: 複数接辞 (plural affix), PUPR: 目的 (格) (purposive(case)), Q: 疑問助詞 (question particle), RLS: 叙述法 (realis(mood)), SC: 場面変化 (scene change), vs: 動詞文標識 (verb sentence marker)

注

- 1 Bühler(1934)の説においては、加藤重広(2004)による『日本語語用論のしくみ』p. 175の記述を参照した。
- 2 ビルマ語はミャンマー連邦共和国の唯一の公用語で、主として日常発話に用いられる口語体と専ら書記に用いられる文語体とがある。
- 3 本稿での音韻表記は岡野(2008)に従う。頭子音(阻害音) p-, p^h-, b-; t-, t^h-, d-; s-, z-; c-, c^h-, j-; k-, k^h-, g-、(共鳴音) m-, hm-; ny-, hny-; n-, hn-; ŋ-, hŋ-、(その他) ʔ-, h-、介子音 -y, -w、母音(単母音) -a, -i, -u, -e, -ɛ, -ɔ, -o、(二重母音) -ai, -au, -ei, -ou、末子音 -ʔ, -N、声調 ˩(22), ˨˩(44), ˨˩˨(41)(軽声音節) -ǎ。頭子音の規則的有声化については ɿ で示した。
- 4 指示代名詞の dīhà, ʔédīhà, hòhà は指示限定詞と形式名詞 hà が複合した形式で「これ(=この+もの)、それ(=その+もの)、あれ(=あの+もの)」に相当する。さらに dīhà, ʔédīhà には融合形式の dà, ʔédà がそれぞれ存在する。hòhà にも融合型 hāwà が存在するが、あまり使われない。
- 5 下線部は本稿で付したものである。
- 6 なお、本稿での研究対象は日本語の「この」と「今の」の両方の意味に対応するビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 dī を中心に考察するものである。ʔǎgû と gûnâ については本稿を進めていくために必要最小限の記述のみにとどめる。また、本稿で取り上げる ʔǎgû は名詞用法に限定し、ʔǎgû là = mè 「今行きます」などの近未来を指す副詞的な用法は扱わない。
- 7 ビルマ語では親族名称を代名詞として使用できるので、初対面の女性にも ʔāmâ 「姉さん」を使用することができる。
- 8 本稿で扱った自然会話の用例は、岡野賢二氏(2016年3月14日収集)に音声データを提供していただいた。ただし、2017年8月31日現在ではデータの整理がまだなされておらず、筆者が試験的にデータ整理のための作業を行っているところである。なお、本稿の用例として掲載するにあたり、会話参加者の承諾を得た。
- 9 現場指示の場合、dī は近称、ʔédī と hò は遠称に分類される(拙論 2015 を参照)。

